環状貝塚論 - 周堤状貝塚の成立と歴史的評価 -

髙梨　俊夫（千葉市立加曽利貝塚博物館）

1　はじめに

縄文時代の「環状貝塚」特に「周堤状貝塚」は、従来の食糧や生業といった経済的視点からの「貝塚」遺跡と異なる視点で考えなければ、その本質は見えてこない。それは、周堤状貝塚は構築物であり、遺構内の点列状環状貝塚や斜面貝層による環状貝塚とは意図が異なるからである。前号の貝塚博物館紀要で環状貝塚とは何かについて、以下のような仮説と議論の方向性を提示した。

「環状貝塚とは、埋葬と物送りを行う円環的死生観と祖霊崇拝を行う系譜的死生観を象徴した構築物であり、集団儀礼場と墓地として機能した。環状貝塚を有する遺跡は、集団儀礼場と墓地を持つ地域の拠点集落である。」「また、加曽利貝塚のような周堤型の環状貝塚は、新石器時代の大型円形記念物として議論していく方向を提唱する。」（髙梨 2018）

本稿では、環状貝塚を環状集落構造の中で形成された宗教的・モニュメント的構築物として捉え、さらにヨーロッパ新石器時代の大型円形記念物「Henge（環状遺構）」や縄文時代の他地域の環状記念物と比較しての議論をすることで環状貝塚の理解を深め、その存在についての歴史的評価をしようとするものである。なお、本稿で使用する「環状貝塚」は、基本的に「周堤状貝塚」を指すものである。

2　縄文時代と新石器時代の時代認識

縄文時代は、新石器時代に相当すると考えられているが、独自性がある。新石器時代は、磨製石器、土器の使用、農耕・牧畜、食糧生産の開始を指標としている。このうち、縄文時代に当てはまるのは磨製石器と土器の使用である。縄文時代は狩猟採集生活が続いており、農耕の起源は弥生時代となっている。

近年、西アジアの新石器時代における農耕起源については、数千年にわたる長期の時間をかけて進行したプロトラクト・プロセスが指摘されており（丹野 2017）、農耕起源を指標とする新石器時代においても長期の移行期が想定されている。これは、ムギ類が野生種から栽培種へと置換わる過程が、3,000 年以上かかっていることを論拠にしている（Tanno and Willcox2006）。このことは、西アジアにおいて農耕・牧畜の開始は、急激なものではなく、狩猟採集生活の中で徐々に成立していったとみることができる。近年、日本の場合も縄文時代の遺跡からダイズ類、アズキ類、クリ類の野生種から栽培種への転換過程を示す資料が発見されている。しかし、コメについては、野生種から栽培種への転換ではなく、栽培種と技術がセットで、しかも人とともに大陸から西日本の縄文時代晩期に伝来したものである。よって、縄文時代は、新石器時代とは基盤とする食糧獲得手段が異なるものの、新石器時代初期において穀類、堅果類の栽培化の過程を歩んでいる点は共通性が認められる。

3　環状貝塚の宗教性・モニュメント性

環状貝塚の宗教性・モニュメント性については、人やイヌの墓を有すること、その他の生物の遺骸が集積していること、径 100m を超える規模を有すること、周堤構造と貝殻の輝きという視覚的象徴性があること、周堤によって内部と外部を隔絶する機能があること、東京湾東岸域という分布圏があり、環状盛

土という類似遺構もあること、周囲の同時期集落のすべてに伴うものではない特殊性があること、などがあげられる。

環状構造のモニュメントには、ヨーロッパ新石器時代の Henge や Stone circle、Timber circle などがある。これらの施設の多くは、墓を伴う祭祀場であり、死者の地下への埋葬と地上の象徴的構築物とで構成されている。構造上、これらの施設での祭祀対象は死者および祖霊であり、葬送儀礼、祖霊祭祀のための施設といえる。また、墓を伴わない、特段機能を持たないものを構築することに意義のあるようなモニュメントも存在する。中には、二至二分のような季節に関わる天文的な観測を示す構造を持つものもある。また、縄文時代には、環状列石、環状集石、環状木柱列、周堤墓、環状盛土、環濠といった環状構造の祭祀関連遺構がある。これらの遺構の発生と展開を分析し、環状貝塚の存在理由を確かめたい。

葬送儀礼について、未開社会では死は一切の終わりではなく、むしろ再生につながる肯定的な意味をもつという「再生観念」がある。死がなぜ再生に変わるのか、J. ボードリヤールは、贈与交換論の文脈において、未開社会では、死を死者の世界へと間違いなく贈ることによって、逆に死者の世界からの生の返礼を期待するという理論で説明している（ボードリヤール 1982)。

縄文時代の埋葬方法については、廃屋葬と呼ばれる竪穴住居に遺体を葬っている例がある。これをモガリの風習とみることもでき、再生観念や円環的死生観の現れであり、白骨化し、貝殻の成分で保存しようとした意図が伺える。また、岩手県西田遺跡や北海道石倉貝塚等でみられる墓域を取り囲む掘立柱建物は、モガリ屋の可能性があると考える。

縄文時代の祭祀遺構については、中期末から後期前葉の中部・関東地方に出現した柄鏡形敷石住居にみられる屋内空間と、外界との結界構造と「埋甕」境界儀礼や後期中葉以降の特殊な大型建物がある。加曽利貝塚では、後期の大型建物があり、石棒、土偶、異形台付土器、玉類等を使用した祭祀が行われていたと考えられている。大型建物には、複数の炉があり、祭祀行為と炉の関わりが指摘されている。

加曽利貝塚の北貝塚は、貝層下の住居跡の時期が基本的には中期であるが、後期の住居が確認されている場所がある。住居、貯蔵穴、墓、貝層が時間的・空間的にどのように展開していったのかを調査することが環状貝塚を解明する鍵となる。また、南貝塚の貝層中に存在を指摘されている住居跡についても用途を特定する必要がある。加曽利貝塚の場合、環状集落の重圏的な居住域、墓域といった区分ではなく、環状構造をとりながら居住域、墓域が重層的に展開し、貝殻で覆っている状況である。

4　新石器時代の大型円形記念物の事例

欧州中心に新石器時代の大型円形記念物が存在している。Henge という環状に土塁や堀を巡らせた構築物や Causewayed enclosure という途切れた溝や土塁を巡らす構築物、それらに Stone circle や Timber circle を伴う事例も知られている。イングランドに所在するものを例示する。

（1）Henge（ヘンジ）：環状遺構（環状の土塁や堀）
- エイブベリー・ヘンジ（ウイルトシャー）径 420m　BC3,200 ～ BC2,600
- デュリントン・ウォールズ（エイブベリー）径 500m　BC2,600 ～ BC2,500
- マウント・プレサント・ヘンジ（ドーセット）径 370m　BC2,879 ～ BC2,870 など

（2）Causewayed enclosure（コーズウェイド･エンクロージャー）:断欠周溝状遺構（通路のついた囲い）
- ウインドミル・ヒル（ウイルトシャー）径 365m　BC3,300 ～ BC3,000 など

（3）Stone circle（ストーンサークル）：環状列石

・ストーンヘンジ（ウイルトシャー）径 30m（径 100m の Henge 内）BC3,000 ～ BC2,000（第 11 図）など

（4）Timber circle（ティンバーサークル）：環状木柱列

・ウッドヘンジ（ウイルトシャー）径 40m（径 110m の Henge 内）BC2,500 ～ BC2,000 など

これらは、埋葬、儀礼、饗宴の場であると考えられている。年代的には農耕・牧畜開始後の食糧生産社会に入っており、開拓地の領有に関わる地域社会のランドマークとしての意味を有していた可能性も指摘している（谷口 2017）。

しかし、農耕・牧畜開始前に築造された例がある。ギョベクリ・テペ遺跡（トルコ・シャンルウルファ）では、環状 T 字形石柱列を伴う大型円形遺構が検出され、紀元前 10,000 年から紀元前 8,000 年頃の年代が与えられている。定住狩猟採集民の造営した祭祀センターであったと解釈されている。

また、北アメリカにも農耕開始前の社会が築造したモニュメントの例がある。ポヴァティ・ポイント（アメリカ・ルイジアナ州）（第 9 図）は、同心の半円形に並ぶマウンド群からなる複合体が 750,000 立方メートルほどもの多くの土を集めて造られたものと推算されている。紀元前 2 千年紀の年代が与えられているが、築造主体がはっきりしておらず、広範な多集団によるものなのか、単独の地域集団によって営まれたものかについては、いまだに議論されている。ポヴァティ・ポイントは、埋葬モニュメントではなく、儀礼や信仰が大規模な協働を実現した力の証拠であると解釈されている（スカー 2018）。

さらに、北アメリカにはポヴァティ・ポイントを遡るマウンドモニュメントがある。ワトソン・ブレイク（アメリカ・ルイジアナ州）（第 8 図）は、マウンド・コンプレックスと呼ばれる大小 11 のマウンドが径約 260 メートルの環状に連なり、今から 5,400 年前から 3,000 年前頃の築造と考えられている。定住以前の季節的な居住に伴うものであり、土器の使用も確認されていない。移動性狩猟採集民によるアメリカ最古のマウンドモニュメントである（Saunders 他 1997）。

また、北アメリカのフロリダ半島沿岸域（サウスカロライナ州、ジョージア州、フロリダ州、アラバマ州、ミシシッピ州）には、Shell Ring（第 10 図）と呼ばれる日本の環状貝塚と極めて類似性の高い遺構が存在する。時代も今から約 5,000 年前から 3,000 年前であり、歴史的にもほぼ同時期のものである（Russo & Heide 2001, Southeast Archeological Center National Park Service 2002）。

集団墓の造営、葬送に関連したモニュメントの築造と儀礼行為には新石器文化と縄文文化との類似性が感じられる。また、農耕開始前のトルコの祭祀センターや北アメリカの儀礼・信仰のためのモニュメントの事例は、狩猟採集社会にある縄文時代の大型円形記念物を解釈する上での参考となる。

5　縄文時代の大型円形記念物の事例

欧州の新石器時代の大型円形記念物の類型に沿って、縄文時代の大型円形記念物を分類してみる。「環状遺構」（Henge）については、縄文時代の場合、構築材である貝か土かで分けた。

（1）「環状遺構」：Henge

①環状貝塚（周堤状貝塚）（Shell Henge[註1]）

（千葉県）加曽利貝塚（第 2 ～ 7 図）・荒屋敷貝塚・姥山貝塚・祇園貝塚・月の木貝塚・園生貝塚・犢橋貝塚・堀之内貝塚・曽谷貝塚・西広貝塚・山野貝塚ほか

②環状盛土（Henge）
（千葉県）井野長割遺跡（第 12 図）・上宮田台遺跡・三直貝塚・三輪野山貝塚、
（埼玉県）馬場小室山遺跡、雅楽谷遺跡、（栃木県）寺野東遺跡・中根八幡遺跡、
（北海道）垣ノ島遺跡（コの字形盛土遺構）・石倉貝塚（第 13 図）ほか
③環濠（Moat）
（北海道）丸子山遺跡（周堤墓を伴う）・静川 16 遺跡、（千葉県）石神台遺跡（部分？）ほか
④周堤墓（Earthwork Burial Circle）
（北海道）キウス周堤墓群ほか

（２）環状列石・環状集石群：Stone circle
（長野県諏訪郡原町）阿久遺跡、（東京都町田市）田端遺跡、（群馬県安中市）天神原遺跡、
（静岡県富士宮市）千居遺跡、（新潟県）元屋敷遺跡、（秋田県）大湯環状列石・伊勢堂岱遺跡、
（青森県）小牧野遺跡・大森勝山遺跡、（北海道）鷲ノ木遺跡、忍路環状列石、石倉貝塚（配石・環状盛土・地点貝層を伴う）ほか

（３）環状木柱列：Timber circle
（石川県）真脇遺跡・チカモリ遺跡、（富山県）桜町遺跡、（滋賀県）正楽寺遺跡、（愛知県）保美貝塚ほか

６　縄文時代の大規模環状集落の事例

加曽利貝塚をはじめとした東京湾岸の環状貝塚は、環状集落に伴い形成されている。各地の環状集落の推移をみることによって、環状貝塚の普遍性と特殊性を考察する。

（１）縄文時代前期
（長野県）阿久遺跡、（栃木県）根古谷台遺跡、（東京都）七社神社前遺跡、多摩ニュータウン No.753 遺跡、（埼玉県）鷺森遺跡、（千葉県）南羽鳥中岫第 1 遺跡 E 地点、木戸先遺跡

（２）縄文時代中期
（岩手県）西田遺跡、御所野遺跡、（山形県）西海渕遺跡、（福島県）法正尻遺跡、（新潟県）清水上遺跡、（長野県）棚畑遺跡（双環状集落）、（山梨県）釈迦堂遺跡群三口神平地区、（群馬県）三原田遺跡（神奈川県）川尻中村遺跡、三の丸遺跡（双環状集落）、（東京都）下野谷遺跡、多摩ニュータウン No.72・795・796 遺跡 、（千葉県）草刈貝塚、有吉北貝塚、子和清水貝塚、中野久木谷頭遺跡、荒屋敷貝塚、月の木貝塚

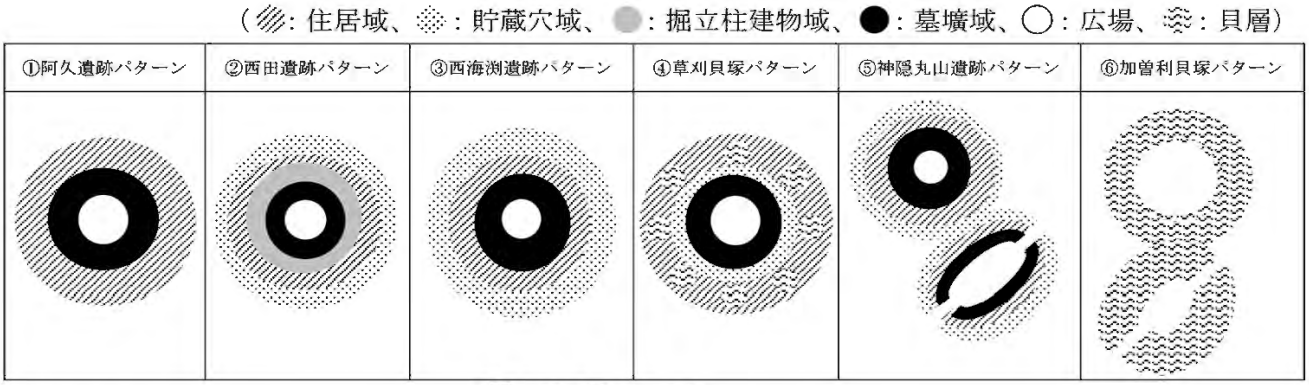
（３）縄文時代中期～後期
（長野県）北村遺跡、聖石遺跡 、（神奈川県）神隠丸山遺跡（双環状集落）、（千葉県）加曽利貝塚（双環状集落）、姥山貝塚、長谷部貝塚、山倉天王（堂谷）貝塚、西広貝塚、祇園貝塚

（４）縄文時代後期
（青森県）風張（2）遺跡 、（山梨県）金生遺跡 、（神奈川県）小丸遺跡 、（千葉県）宮内井戸作遺跡、堀之内貝塚、曽谷貝塚、犢橋貝塚、園生貝塚、台門貝塚、草刈場貝塚、多部田貝塚、矢作貝塚、築地台貝塚

（５）環状集落の構造パターンの比較（第 1 図）

①阿久遺跡パターン：前期環状集落と環状集石：外側から竪穴住居群・墓壙群とそれを覆う集石群
②西田遺跡パターン：中期環状集落：外側から貯蔵穴群・竪穴住居群・掘立柱建物群・墓壙群
③西海渕遺跡パターン：中期環状集落：外側から貯蔵穴群・竪穴住居群・墓壙群
④草刈貝塚パターン：中期環状集落と点列状貝塚：外側から竪穴住居群・貯蔵穴群・墓壙群に遺構内貝層
⑤神隠丸山遺跡パターン：中期と後期の双環状集落：外側から貯蔵穴群・竪穴住居群・墓壙群
⑥加曽利貝塚パターン：中期と後期の双環状集落と双環状貝塚：貯蔵穴群・竪穴住居群の上に埋葬遺構・貝層

環状集落の構造は、外縁部に貯蔵穴や竪穴住居、内縁部に墓壙群を持つことに共通性があり、中間域に掘立柱建物の有無、内縁部の墓壙群を石で覆うかどうかにバリエーションがある。また、環状貝塚を伴う場合は、貯蔵穴群・竪穴住居群の上に貝層が覆っている。環状貝塚は、独立しては存在せず、環状集落と重なっている。



第１図　環状集落の構造パターン模式図

7　総合的検討

谷口康浩は、ブリテン新石器時代と縄文時代の比較において「二つの先史社会の比較からあらためて浮彫となったのは、複雑化する社会を統合し秩序づけるためには、集団墓の造営やモニュメントの築造といった社会的行為と、それに合理的な根拠を与える宗教的イデオロギーの二つが重要であったという点である。ブリテン新石器文化に顕著なモニュメント築造は、「共同幻想」ともいうべき世界を創出し脚色するものであり、それを物質化する集団的行為によって、社会統合と集団的アイデンティティーの維持強化が図られていったと説明することができる。それは、縄文時代後半期に盛行した配石遺構の築造行為と、本質的に共通するものであった。」（谷口 2017）としている。

また、谷口康浩は「文化景観を形づくる基本的な文化要素には「生態・機能」「社会構造」「イデオロギー」の三領域に跨るが、宗教的観念や世界像などのイデオロギーとそれに根差すシンボリズムは、文化に固有の象徴と意味の体系であって、部外者による容易な解釈を許さない。遺跡として残された景観から過去の人びとの観念・思考を読み解くことは難しく、集落論と呼ばれる分野においてもこの方面の研究が最も立ち遅れているといわざるをえない。」（谷口 2017）と指摘している。

日本列島での大型円形記念物は、長野県阿久遺跡で縄文時代前期末に環状集落の集団墓を覆う形で環状集石群が発生している。墓に墓標のように石を積む風習は、早期後半に鳥取県上福万遺跡の配石墓に認められる。このことは、墓所に恒久的なモニュメントを築造し、祖霊祭祀の継続性を意図したものであるこ

とが明らかである。集団墓は出自集団のアイデンティティーの中心であり、モニュメントの造営はアイデンティティーの主張の強化とみることができる。環状列石は、その後、北関東、西関東、静岡、新潟、東北、北海道に分布が広がる。

また、環状木柱列は、北陸地方を中心に滋賀、愛知に分布し、環状貝塚は東京湾東岸域、環状盛土は環状貝塚の縁辺部及び北海道、環濠・周堤墓は北海道に分布している。いずれも集団墓に伴って構築されているものである。北海道函館市石倉貝塚では、縄文時代後期初頭に集落から独立して集団墓、配石、環状盛土、地点貝塚を伴う祭祀場が形成されている。

環状集落の展開として、居住域の内側に墓域を設けるケースと墓域を独立させるケースがある。特に北海道及び東北北部では中期末以降、墓域は独立する傾向がある。一方、居住域の内側に墓域を設ける場合も配石の有無、掘立柱建物の有無等の相違が認められる。

環状集落と環状遺構との関係性を時期ごとに例示する。共存は、集落（居住域）と墓域・祭祀場が環状集落構造の中で一体となっているもの、独立は、墓域・祭祀場（環状遺構）が集落（居住域）とは別の場所に営まれている例である。

・縄文時代前期：環状集落形成と内帯の集団墓を覆う集石
　（共存）集落・墓・集石：長野県阿久遺跡
・縄文時代中期：環状集落の拡大と墓域・祭祀場の共存または独立
　（共存）集落・墓・貝塚：千葉県加曽利貝塚・草刈貝塚・子和清水貝塚、
　　集落・墓・配石：神奈川県川尻中村遺跡、長野県北村遺跡
　（独立）環濠：北海道静川 16 遺跡
・縄文時代後期：北海道・東北で墓域・祭祀場の独立の顕在化
　（共存）集落・墓・貝塚：千葉県加曽利貝塚
　　集落・墓・盛土・貝塚：千葉県三直貝塚・三輪野山貝塚・山野貝塚
　　集落・墓・盛土：千葉県井野長割遺跡、栃木県寺野東遺跡
　（独立）墓：北海道キウス周堤墓
　　墓・配石・盛土・貝塚：北海道石倉貝塚
　　墓・環状列石：青森県小牧野遺跡、秋田県大湯環状列石
・縄文時代晩期：集落数の減少と墓域・祭祀場の独立
　（独立）環状列石：青森県大森勝山遺跡

東京湾東岸域の環状貝塚は、環状集落の形成過程と密接な関係を持ち、居住域と墓域が重圏（重帯）的に展開せず、重層的に展開したものであると考察する。環状盛土も基本的に同様の構造であると考える。掘立柱建物の有無は、葬送儀礼の過程で掘立柱建物をモガリ屋として使用したのか竪穴住居を兼用モガリ屋として使用したのかの違いとみている。

墓域および祭祀場が居住域から独立する場合と居住域に内包される場合の差異は、集落密度との関係はないだろうか。縄文時代の遺跡密度を示すデータによると、東京湾東岸域の密度が非常に高くなっている。土地利用からも垂直方向への展開が自然だったのかもしれない。また、集落の推移の中で居住期と貝塚形成期が時間的、空間的にどのように展開していったのか、例えば、環状集落内の居住域の移動に伴いながら貝塚が形成されていったのか、集落移転後に貝塚を形成したのか分析が必要である。北海道・東北地方

の墓域・祭祀場が居住域から独立して形成されている例を考えると空間的には共存している場合であっても時間的に両者が共存したとは限らない。

また、このような祭祀場は割と隣接して競合するように造営されている傾向にある。人口密度の高まりと寒冷化する気候の中での食糧獲得への不安感から祈りを捧げる施設の造営をしたのではないか。

加曽利貝塚の南貝塚では北東部分に貝層の切れる開口部がある。南貝塚の南西側にも不整形ながら開口部がある。北貝塚も発掘調査によって北東部分は中期の段階では開口していたことが確認されている。いつの時点で現形状になったのか不明であるが、北貝塚は縄文時代の最終形態を留めており、南貝塚では、南西部分が後世の改変を受けている可能性もあると考えている。中期の段階、後期の段階に同一方位の場所に通路状の間隙が存在することは、同一思想の設計意図が伺える。これまで、環状貝塚の開口部については、谷部につながる通路との見解が主流であるが、ある種の方位を示す意図的な遺構として捉えることも必要であり、加曽利貝塚は北東を意識して構築されていることは客観的事実である。

環状遺構の方位性については、秋田県大湯環状列石では日時計状配石を見とおす方向に夏至の太陽が沈み、青森県小牧野遺跡では環状列石中心部から八甲田山の方向に冬至の日の出、青森県大森勝山遺跡では岩木山頂に冬至の日没、北海道石倉貝塚では、冬至の日没方向に環状盛土が開口し、その延長上に土壙列があるように太陽の運行を意識した設計がされていることが縄文ランドスケープの見地から指摘されている（小林 2002）。

イギリスのストーンヘンジも夏至の日の出の方向に Henge が開口していることが知られている。環状貝塚の形成意図は、環状集落と環状記念物を重層的に展開させたものであり、生命を終えたものを集積し、再生を祈る場であったと思っている。これは太陽の二至二分にみられる季節の盛衰、日の出・日の入りに生命の誕生と死をアナロジーとして結びつけ、説明しようとしたものではないかと考える。また、縄文ランドスケープの考え方では、環状列石などの記念物の立地を特定の山と二至二分の日の出、日の入りの太陽の位置との関係で説明している。小林達夫は、記念物を葬祭センターとすることを否定している（小林 2002）が、記念物といわれる遺構には、ほとんどに人の埋葬が関わっていることを重要視すべきである。また、環状列石に葬られた人は、一部であり、記念物の本質を示すものではないとしているが、加曽利貝塚には、ほんの一部の調査で既に 231 体の人骨が出土している。日本列島の記念物は、墓と祭祀場と一体となっていることに意味があるのである。

近年話題になっている富士山頂に夕日が沈む「ダイヤモンド富士」は、千葉市域では 2 月下旬と 10 月中旬に観ることができる。美しさと共に 2 月は春の到来、10 月は冬の到来を感じる。

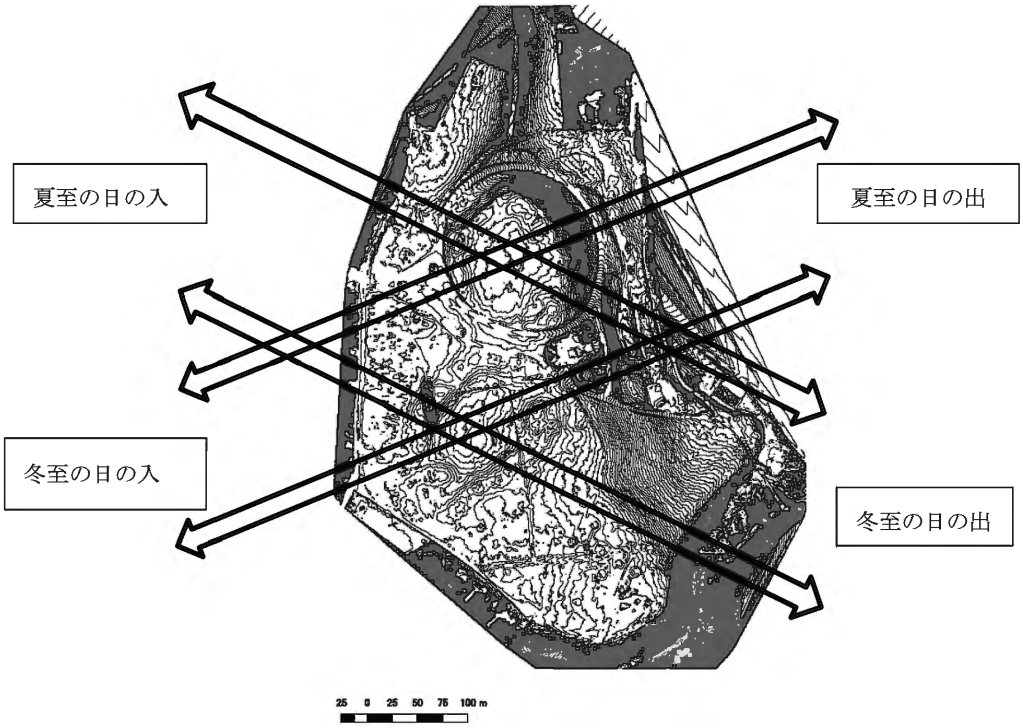
加曽利貝塚の所在する地域からは、日の出の方向に二至二分の目印になる山は存在しない。よって、周堤の開口部等の構造物で方向を示す必要があったのではないか。また、日の入りは正確に二至二分を示す方向に山がない場合は、構造物で太陽の方向を示すか、二至二分以外に定期的に季節を計ることのできる富士山を目印にした可能性もあるのではないかと考える。

一方、加曽利貝塚の北貝塚・南貝塚の周堤の開口方向から考えると、開口部は中心からの方位としてはどちらも北東に近い位置にある。基本的に夏至の日の出の方角を意識していると考えられるが、太陽以外の天体の信仰の可能性も考慮する余地がある。また、コーズウェイド・エンクロージャーのように貝層のマウンドがブロック化している状況からマウンドとマウンドの間も方位性を示している可能性がある[註2]（第 2・3 図）。

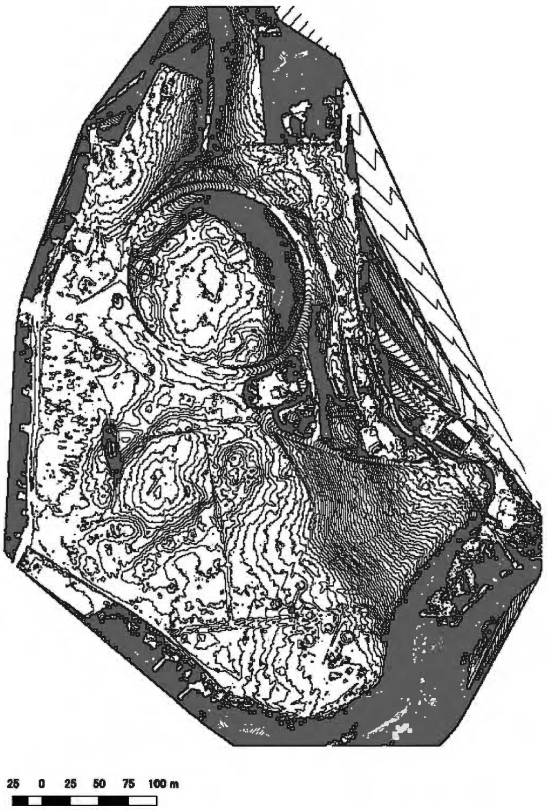
北アメリカ、オハイオ州・イリノイ州で栄えたホプウエル文化期（紀元前 1 世紀～紀元 3 世紀）のニューアーク土塁遺跡群では、18.6 年に一度、月が一番北から昇る方向を示す遺構が存在する（佐々木 2018）。

また、エジプト最古のピラミッドであるネチェリケト王（在位 BC2,665 ～ 2,645 年）の階段ピラミッドでは、ピラミッド北側に葬祭殿が位置し、安置された王の彫像の視線が当時の北極星であったりゅう座のα星の方向であり、北辰信仰を具現化している。ギザの 3 大ピラミッドになると東側に葬祭殿が移り、3 つのピラミッドの底辺の南東頂点を結んだ延長線上には太陽信仰の中心地であるヘリオポリスがあるように各地のモニュメントには方位性があり、かつ、時代によって信仰する天体が変わることがある。加曽利貝塚の開口部は何を示すのか、未検出の開口部はあるのか等、今後の検討が必要である。

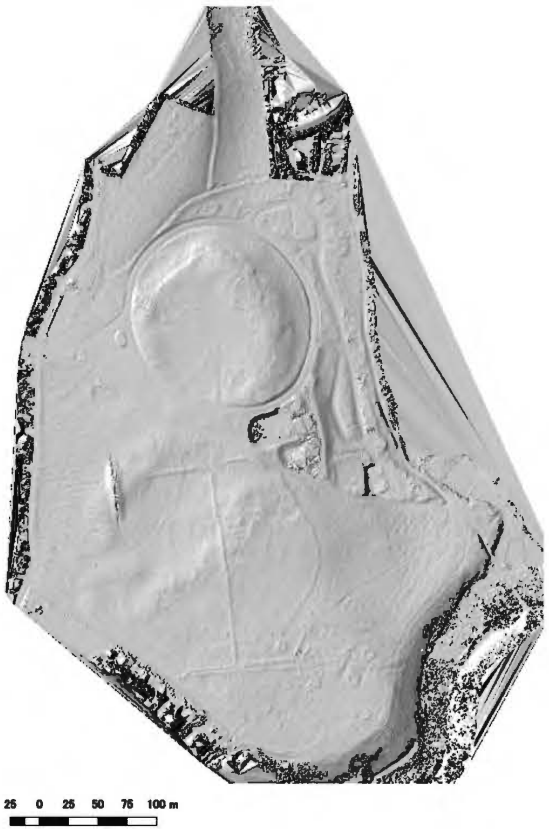
第２図　貝層範囲及びマウンドブロックの状況



第３図　加曽利貝塚北貝塚・南貝塚の中心部からみた夏至・冬至の日の出・日の入の方向



第４図　加曽利貝塚地形図（25cm コンター）



第５図　加曽利貝塚地形陰影図

第６図　加曽利貝塚地形図（50cm コンター）

第７図　加曽利貝塚貝層範囲

8　まとめ

環状貝塚は、環状集落の墓所に不滅材である貝殻で恒久的なモニュメントを築造し、祖霊祭祀の継続性を意図したものである。これは、長野県阿久遺跡の縄文時代前期の集団墓を覆うように発生した環状集石群に通じるものと考える。房総半島という大量の石を調達できない地域で大量に調達可能な恒久構築材が貝であったのではないか。しかも貝は食材であり、調達採取のモチベーションは高まり、中でも年間を通じて簡単かつ大量に採取可能なイボキサゴは、絶好の漁の対象になったものと考える。

山本典幸はリチャード・ブラッドレーのモニュメント研究について、モニュメントという「物質文化要素とその生産・構築・再利用を社会や文化の反映として捉える以上に、それらが既存とは異なる社会を創り、文化を変えていく力になりうるといったマテリアリティを強調するわけである。」と紹介している（山本 2017）。

環状貝塚は、集団墓を内包し、築造されたモニュメントである。モニュメント築造は、社会統合と集団的アイデンティティーを維持強化し、組織的な集団作業を伴う稲作農耕文化を受容する社会環境をつくったという歴史的評価ができる。環状貝塚は、縄文時代中期から晩期に築造され、その前後で社会がどのように変容したか。広くとらえれば、狩猟採集社会から食糧生産社会に移行したといえる。狩猟採集社会の末期に登場したのが環状貝塚であった。加曽利貝塚からは、遠隔地交易により入手した希少性のある威信財が出土していることから、階層化した社会の存在が想定される。このことは、食糧生産経済の成立が社会の複雑化を促したとされる従来の歴史認識に矛盾するものである。しかし、階層化した社会も集団墓の中での副葬品の違い程度であるため、弥生時代・古墳時代の首長とは、性格が異なる。

さらに、加曽利貝塚の場合、貝塚を形成しない晩期の集落が継続することが明らかになっている。安行 3b 式の竪穴住居跡には、貝殻の充填は無く、均一なローム質土で埋められていた。床面からは石剣や焼けた獣骨が出土し、儀礼祭祀及びそれに伴う饗宴により消費されたものだと推定される（千葉市教育委員会 2018）。

谷口康浩は縄文社会が稲作を受容した理由を「集団あるいはリーダーたちの威信と面目をかけた権力資源の追及、それがむしろ稲作の受容につながる重要な動機ではなかったか。」と指摘し、従来の「限界に達した採集経済の矛盾（岡本勇 1975）を克服するための新たな生産手段として受容された」という説に疑問を呈している（谷口 2017）。三宅裕は、西アジアの新石器時代について「これまで一般に農耕・牧畜を基盤とする食糧生産経済の確立が、社会の複雑化をもたらしたと考えられてきた。近年の研究成果は、こうした新石器時代論に疑問を投げかけている。」「最近では新石器時代初頭にモニュメントと呼べるような大型建造物や祭祀センターと考えられる遺跡の存在が明らかになり、農耕・牧畜に基盤を置く社会が成立する前に、複雑化した社会が形成されていた可能性が議論されている。これまでのように、食糧生産経済だけに注目していたのでは社会の変容を十分に説明できない事態となり、「新石器革命」論そのものが大きく揺らいでいる。」「食糧生産経済の成立が社会の複雑化を促したとは考えにくい状況にある」（三宅 2017）としている。

また、谷口康浩は「儀礼祭祀の発達は、宗教的観念の深化を意味するのみならず、一方でそれに関連した物質文化を生み出し、それを支える生産と消費を発達させることになるのである。」とも指摘している。社会の複雑化は、食糧生産経済の確立に先行している。弥生時代から古墳時代前期までの王の姿は、卑弥呼に象徴されるような宗教的な司祭の色彩が強い。

周堤状貝塚を有する集落では、東京湾東岸域において、儀礼祭祀を発達させ、それに関わる生産と消費を発達させた。その結果、威信財の取得と儀礼を可視化する貝塚モニュメントの築造という権力資源の追及が加速し、社会の複雑化を促した。

加曽利貝塚では、環状貝塚の形成が縄文時代後期後半で終了するが、集落としては晩期に入っても継続する。おそらく、その頃に気候変動等により貝の大量採取ができなくなり、宗教的モチベーションは貝塚形成から再送墓やその他の祭祀に転換したと思われる。次のステージは、稲作を受容し、権力資源をコメへとシフトさせた食糧生産社会である弥生時代が始まる。

社会の複雑化は、食糧生産経済からのみ萌芽するものではなく、食糧獲得経済からも萌芽することが指摘されている。また、中国湖南省の少数民族トゥチャ族の例など食糧生産経済に移行しても社会の複雑化が起こらない民族もいる。

縄文時代は、縄文土器の使用、土偶、石棒の祭祀を列島全域で展開する「内部」で熟成された文化である。そこに、大型円形記念物の造営などの宗教的モチベーションの高まりと稲作農耕というイノベーションが起こってくる。稲作農耕を受容しなかった北海道では社会の複雑化の状況は、どうだったであろうか。

北海道では、続縄文時代になると交易のための狩猟に特化し、ヒグマの毛皮は大和王権の威信財として重宝された。北海道でもガラス玉、南海産貝製品、鉄器など弥生・古墳文化の権威を象徴する副葬品をもつ墓が出現し、階層化がもたらされた。従って、北海道では稲作農耕を受容せず、毛皮を中心に交易する商業的狩猟民としての経済的社会の中で複雑化が生じている（瀬川 2016）。社会の複雑化は、宗教的儀礼祭祀の発達による威信財の取得と権力資源の追及、異文化との接触によってもたらされるものであり、必ずしも食糧生産経済がもたらすものではないことが縄文時代、続縄文時代から伺える。

加曽利貝塚の性格は、環状集落として長期継続し、交易品が多数搬入する地域の拠点集落であったとともに環状集落に重なるように展開した宗教的記念物でもあった。祖霊祭祀と物送り祭祀場として生命を終えたものを集積する場であり、生と死の現象を太陽運行等になぞらえて説明し、生命の循環に祈りを捧げた場であった。その成因となる時代背景には、非文明社会、温暖な気候から寒冷化へ向かう気候、世界各地での環状記念物の造営、東日本各地での環状記念物・環状集落の造営、などがある。また、東京湾東岸域の地域性として、環状列石を構築するような石材は欠乏しているが、豊富な貝を採取できる環境があり、しかも緩やかな河川での容易な水運により貝を集落まで持ち込むことができる。しかし、当時、日本列島内で最も高い集落密度があり、土地利用が制限された可能性があり、集落密度が高いゆえに、食糧採集領域の競合や寒冷化へ向かう気候での食糧資源の減少が不安をもたらしたものと思われる。

この時代背景と地域性が加曽利貝塚という周堤状の大型環状貝塚を生み出したものと推測する。そして、大型環状貝塚は東京湾東岸域の市川市堀之内貝塚から木更津市祇園貝塚まで約 20 か所分布し、そのうち縄文時代中期の台地上の周堤状貝塚は市川市姥山貝塚、千葉市荒屋敷貝塚・加曽利貝塚、木更津市祇園貝塚などである。なかでも初現は、中期中葉の市川市姥山貝塚と千葉市加曽利貝塚であり、そこから分布を広げ、後期に入るとその縁辺地域には貝ではなく土で周堤を築いた環状盛土が分布する。この周堤状の構造に共通の精神があり、「環状貝塚文化」を形成していった。さらに、房総半島南端域には、館山市大寺山洞穴・鉈切洞穴・安房神社洞窟遺跡など海食洞穴内に埋葬及び遺骸、道具類を集積している例がある。貝塚や盛土を形成しないまでも同じイデオロギーによるものであり、洞穴への埋葬の風習は古墳時代まで継続している。これらは、東北・北海道・北関東・西関東・甲信越・東海東部地方の環状列石・環状集石

群、北陸・東海西部地方の環状木柱列、北海道の環濠、環状盛土、周堤墓に通じる文化圏をもった記念物であるといえる。

このことから、周堤状貝塚は、東京湾東岸域において環状集落に重層的に展開した新石器時代の Henge に類する宗教的記念物であり、そう考えた場合、松木武彦の指摘する生命の再生を太陽などの天体運行になぞらえて祈るアナロジー的思考による構造物であるといえる（松木 2017）。また、縄文時代において、宗教的モチベーションを高め、社会の複雑化を促進したことで、階層化社会を萌芽させたという歴史的評価ができる。これは、T.Earle の権力資源論（Earle1997）における権力源のひとつである儀礼を重視し、イデオロギーを具現化させたモニュメント構築を媒介として権力者を誘発したという説で説明できるものである。

また、今後の課題としてアメリカ南東部に所在する Shell Ring（第 10 図）との比較研究を行う必要がある。文化の伝播しえない遠隔地において、同時代に展開した貝を環状に盛り上げる行為の共通性は、環状貝塚の本質を理解し得るヒントを与えてくれるものと考える。環状貝塚を含む遺跡の構造を理解することができれば、縄文時代当時の社会組織、習俗、人口、儀礼祭祀、土木建築技術、民族的アイデンティティーなど多くのことが解明される可能性があり、人類史における環状貝塚形成の意味を説明することが可能となろう。

そのためには、環状貝塚の調査方法を検討し、居住行為、埋葬行為、生活行為、祭祀行為、貝塚の構築行為などが時間的、空間的にどう展開されて来たのかを考古学の手法によって、時代を遡りながら確実に復元していく調査技術が必要である。幸い、9 割以上の未調査部分を残す加曽利貝塚は、縄文時代の社会を解明する鍵を握っているといっても過言ではない。

註

1　Stone Henge に倣い、環状貝塚の英訳を Shell Henge とした。貝塚は、海外ではその形状によって Shell Mound, Shell Heap, Shell Ring 等と標記されており、性格を示す場合は Kitchen Midden 等と標記されたりしている、日本の貝塚は Shell Mound の和訳であるが、環状貝塚の適切なイメージを伝える場合は、形状的には Shell Heap, Shell Ring に近いが、形状と性格を併せ持つ Shell Henge を使用したい。

2　今後、詳細測量や地中レーダー探査、発掘調査の成果によって検証する必要がある。

引用・参考文献

高梨俊夫 2018「環状貝塚の本質 - 特別史跡指定に寄せて加曽利貝塚を考える - 」『貝塚博物館紀要』第 44 号 千葉市立加曽利貝塚博物館

丹野研一 2017「西アジアにおける農耕起源とムギ類の栽培化」『農耕の起源と拡散』アジア考古学四学会編 高志書院

Tanno K. and G.Willcox 2006 How Fast Was Wild Wheat Domesticated? Science, Vol311, Issue 5769,pp.1886

J. ボードリヤール 1982『象徴交換と死』筑摩書店

クリス・スカー 2018「先史・原史社会の墳墓モニュメント：世界的視野から見た日本の古墳」国立歴史民俗博物館国際シンポジウム『日本の古墳はなぜ巨大なのか？−古代モニュメントの比較考古学−』予稿集 pp.61

谷口康浩 2017「第 9 章 ブリテン新石器文化と縄文文化の比較考古学」『縄文時代の社会複雑化と儀礼祭祀』pp.252-253 同成社

小林達雄編 2002『縄文ランドスケープ』 ジョモネスクジャパン

佐々木健一 2018「北アメリカ先史時代モニュメント」国立歴史民俗博物館国際シンポジウム『日本の古墳はなぜ巨大なのか？-古代モニュメントの比較考古学-』予稿集 pp.37 及び追加資料

山本典幸 2017「マテリアリティとしての敷石とその場所が創る特異な景観 - 縄文時代中期終末の石棒を残す敷石遺構 - 」『理論考古学の実践Ⅱ実践篇』pp.225-226 同成社

千葉市教育委員会 2018 「特別史跡加曽利貝塚平成 30 年度発掘調査現地説明会」資料

岡本　勇 1975「原始社会の生産と呪術」『日本歴史 1』pp.75-112 岩波書店

谷口康浩 2017「第 10 章 儀礼祭祀と生産の特殊化 - 縄文人はなぜ稲作を受容したのか - 」『縄文時代の社会複雑化と儀礼祭祀』pp.273-274 同成社

三宅　裕 2017「揺らぐ新石器革命論 - 農耕・牧畜の起源と新石器時代の社会 - 」『季刊考古学』第 141 号　西アジア考古学・最新研究の動向

瀬川拓郎 2016『アイヌと縄文』pp.75 筑摩書房

松木武彦 2017『縄文とケルト－辺境の比較考古学－』筑摩書房

T.Earle 1997 How Chiefs Come to Power. Stanford University Press.

Joe W.Saunders, Rolf D.Mandel, Roger T.Saucier, E.Thurman Allen, C.T.Hallmark, Jay K.Johnson, Edwin H.Jackson, Charles M.Allen, Gary L.Stringer, Douglas S.Frink, James K.Feathers, Stephen Williams, Kristen J.Gremillion, Malcolm F.Vidrine, Reca Jones 1997 A Mound Complex in Louisiana at 5400-5000 Years Before the Present, SCIENCE VOL277,PP.1796-1799

Russo, Michael, Gregory Heide, 2001 Shell rings of the southeast US. Antiquity 75(289), PP. 491-492

Southeast Archeological Center National Park Service 2002 Archaic Shell Rings of the Southeast U.S. National Historic Landmarks Historic Context

佐倉市教育委員会 2015 井野長割遺跡国指定 10 周年シンポジウム縄文時代のムラと盛土

Wood J.E. 1978, Sun, moon, and standing stones. Oxford University Press. Oxford, London, New York.

函館市教育委員会 1999 函館市石倉貝塚 函館空港拡張整備工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

【参考となる遺構一覧】

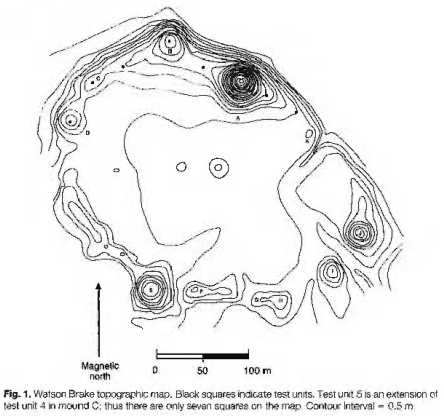
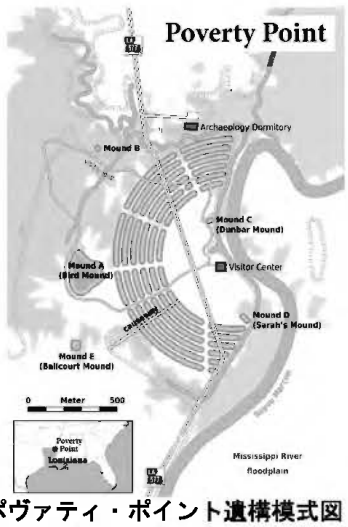


Fig. 1. Watson Brake topographic map. Black squares indicate test units. Test unit 5 is an extension of test unit 4 in mound C; thus there are only seven squares on the map. Contour interval = 0.5 m.

第８図　ワトソン・ブレイク・マウンドコンプレックス（Saunders 他 1997 より転載）



第９図　ポヴァティ・ポイント遺構模式図（Louisiana Department of Culture　Web ページより転載）

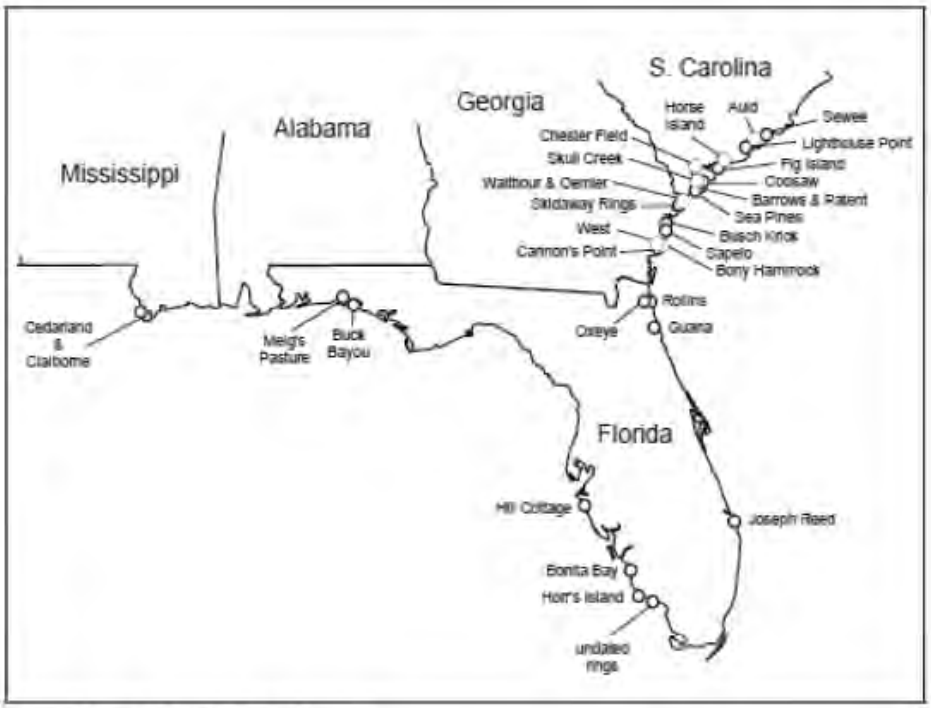


Figure 2. Late Archaic shell-ring location.

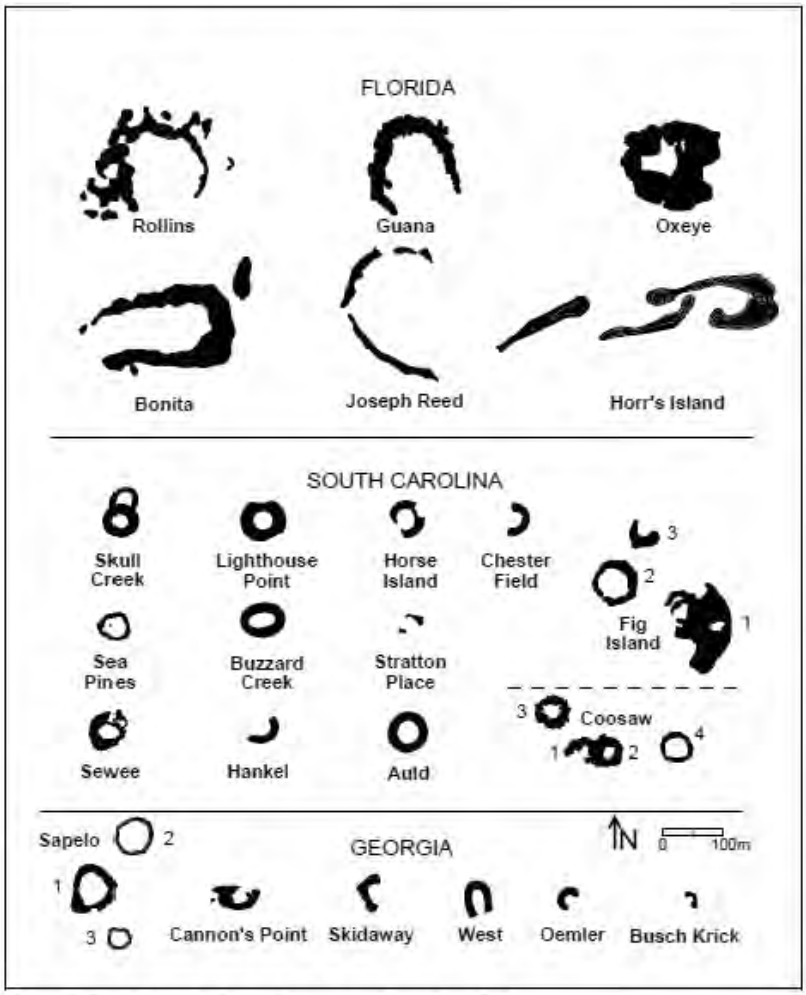
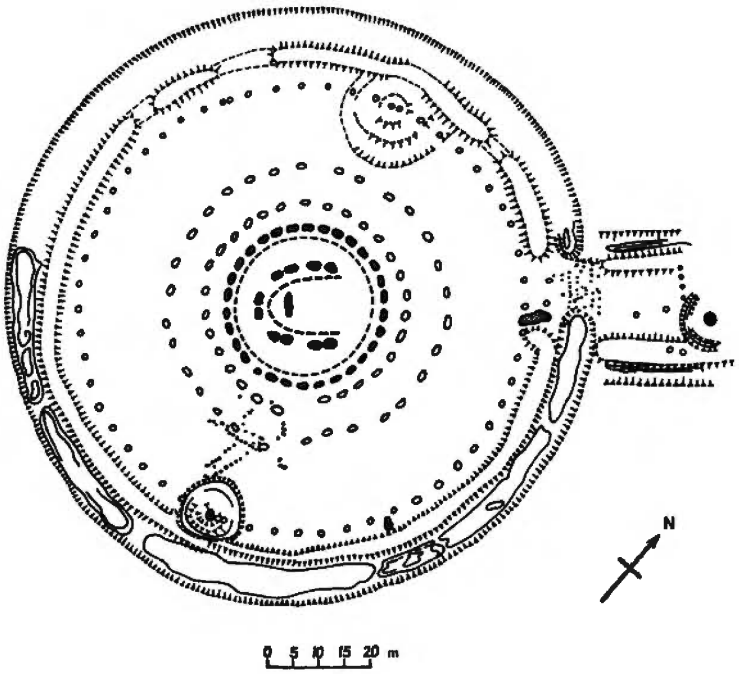
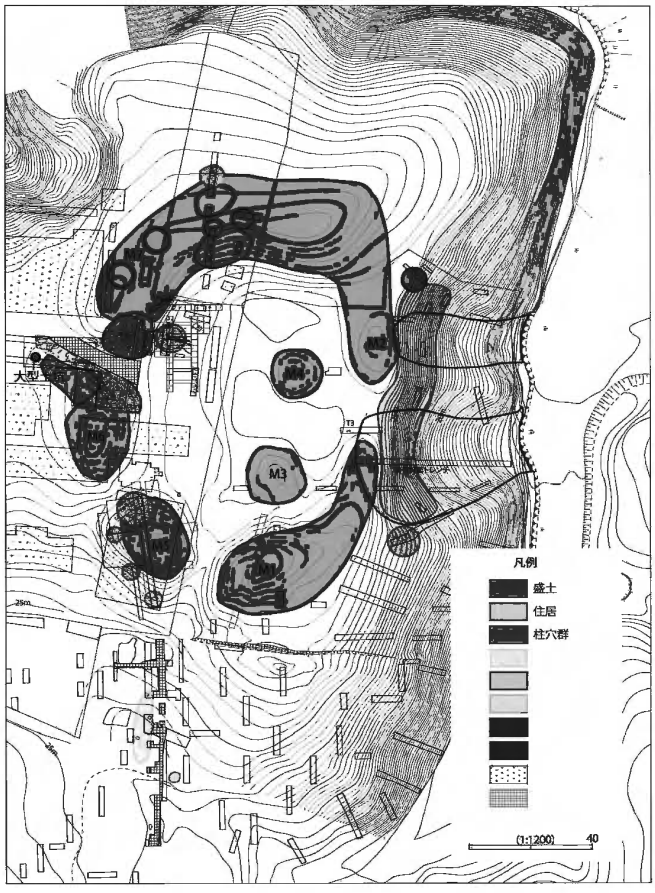


Figure 1. Late Archaic shell-ring footprints in the southeast U.S.

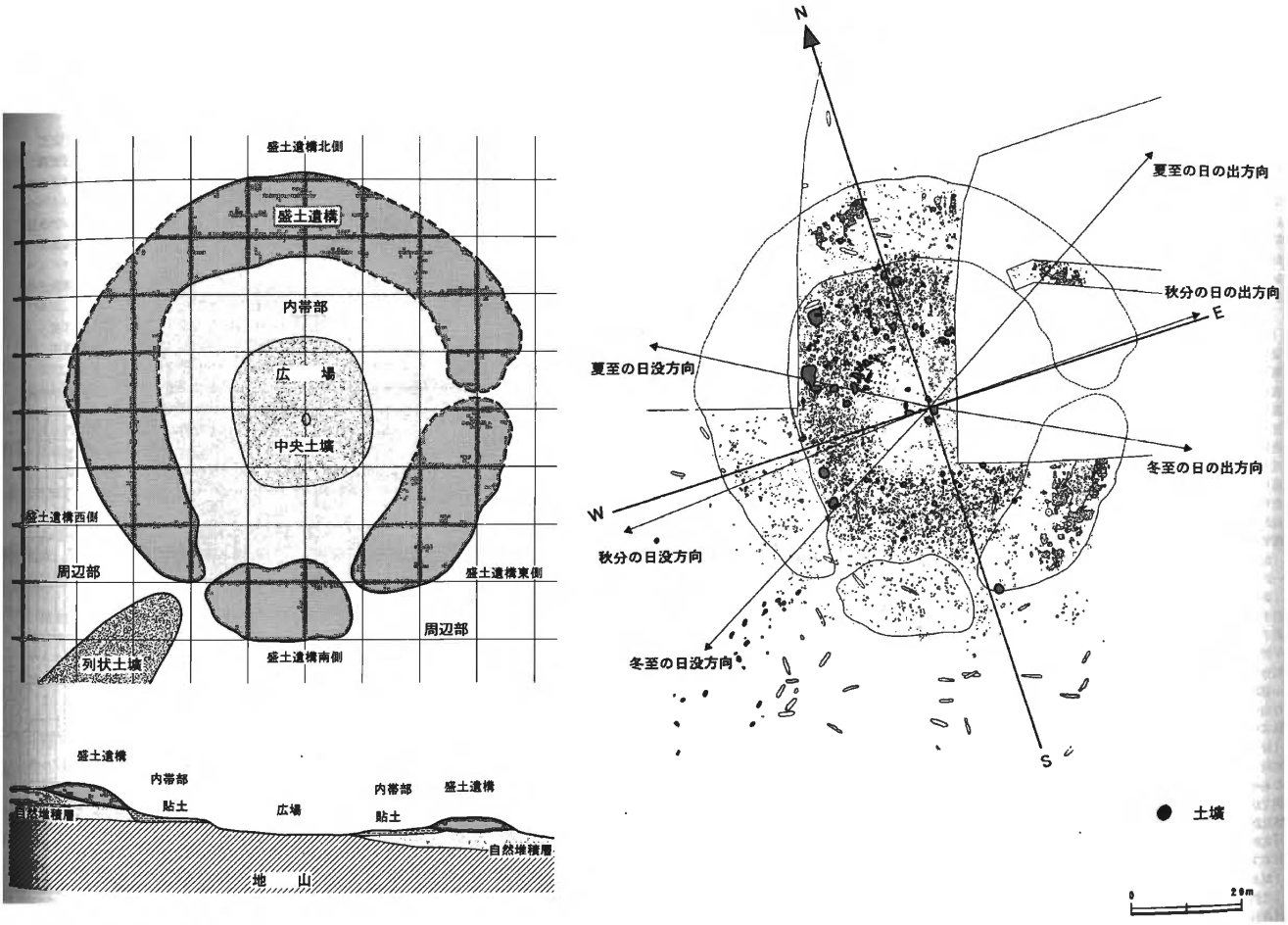
第 10 図　アメリカ南東部の Shell Ring（Southeast Archeological Center National Park Service 2002 より転載）



第 11 図　ストーンヘンジ平面図（Wood J.E. 1978 より転載）



第 12 図　井野長割遺跡地形復元図（佐倉市教育委員会 2015 より転載）



第 13 図　石倉貝塚Ａ地区遺構模式図・太陽運行と遺構配置（函館市教育委員会 1999 より転載）